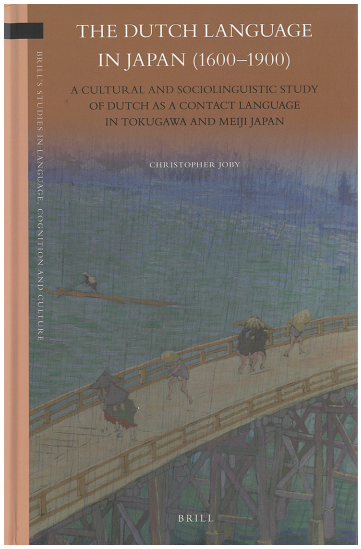
書評論文

クリストファー・ジョビー著『日本におけるオランダ語（一六〇〇～一九〇〇）——徳川・明治日本における接触言語、オランダ語の文化的・社会言語学的研究』を読んで

松田　清



Christopher Joby, *The Dutch Language in Japan (1600–1900): A Cultural and Sociolinguistic Study of Dutch as a Contact Language in Tokugawa and Meiji Japan*. Brill, 2021

はじめに

本書 *The Dutch Language in Japan (1600–1900): A Cultural and Sociolinguistic Study of Dutch as a Contact Language in Tokugawa and Meiji Japan*. は、「オランダ語が徳川日本に入り他言語と接触したとき何が起きたのか」という問いを立て、これに答えるべく「日本におけるオランダ語の知識と使用に関する包括的分析」を行った学術書である。研究対象は一六〇〇年、オランダ船リーフデ号が豊後に漂着し、乗組員が上陸した時から三百年間に日本で使用された「さまざまなオランダ語」（varieties of Dutch）である。

オランダ東インド会社（一六〇二～一七九九）の数多くの商館中、喜望峰から最も東に位置する平戸オランダ商館（一六〇九～一六四〇）、ついで長崎の出島オランダ商館（一六四一～一八六〇）には、船乗り、商館長・商館員、外科医、商人、商館の使用人（日本人も含む）・奴隷などからなる多国籍のオランダ語使用者たちがいた。彼らは遊女、通詞、各地の商人、医師、大名やその家臣、将軍の重臣から下級の幕臣にいたるまで、実に多様な日本語使用者の「さまざまな日本語」や「さまざまなオランダ語」に接した。また、蘭学者や蘭学塾の学生、在村の医師たち、絵師や戯作者なども、書物（多くは書写されて流通した）を介してオランダ語に接した。

著者はこの「さまざまなオランダ語」と「さまざまな日本語」の接触の物語を、通時的な文化史的記述と共時的な社会言語学的分析を織り交ぜて、「十分に日本語に通じていない研究者」のために叙述している。社会言語学的分析の例をあげれば、著者は言語使用中に戦略的に他言語に切り替える「コード・スウィッチング」（例：手紙の冒頭や末尾でのラテン語使用、文中に原語で引用される発話や諺など）、他文化に固有で自文化にない事物を原語で指し示す穴埋め「ギャップ・フィリング」（例：重箱をgioubackje、乗り物をnorimonと呼ぶ）などの現象例を収集する。また、多言語社会のなかで他言語に比してより広い通用勢力を有するＬＷＣ（Language of Wider Communication、広域通用語）の概念を、リーフデ号漂着当時からポルトガル人追放（一六三六）の数十年後に至るまで、長期間オランダ語に対して優勢を保っていたポルトガル語や、一八六〇年代にオランダ語を駆逐していった英語に適用する。

著者はまた、本書の随所で、日本における接触言語としてのオランダ語のさまざまな役割を、ギリシア語やラテン語を援用した用語で規定し、エピローグ（終章）で要約している。すなわち、エムポリオレクト（empoliolect、交易語）、サーレクト（thurlect、他言語学習のための媒介語）、リンギファー（linguifer、ラテン語などを伝えた導引語）、メタレクト（metalect、科学知識摂取のための高次語）等々の用語である。さらに、漢学を素養とした蘭学者たちの漢文読解式翻訳法を解釈するのに、社会学者ピエール・ブルデューのhabitus（社会的習慣）概念を、大槻玄沢『蘭畹摘芳』の挿絵に加えられた漢字や片仮名によるラテン名、和名、漢名の混在を説明するのに、バフチンのヘテログロシア（heteroglossia、同一作品中の異語併用）の概念を援用する。

したがって、本書は本来、社会言語学者が書評すべきであろう。門外漢の評者に書評の依頼が舞い込んだのは、著者の研究方法に由来するかもしれない。著者は平戸や出島の商館文書、ライデン大学図書館およびオランダ国内所蔵の和書、商館長イサーク・ティチングが福知山藩主・朽木昌綱やオランダ通詞たちと交わしたオランダ語の往復書簡（F. Lequin, 1990, 1992）[1]、国立国会図書館所蔵幕府旧蔵蘭書、松浦史料博物館所蔵松浦静山旧蔵蘭書[2]、武雄市図書館・歴史資

料館所蔵蘭学資料、早稲田大学図書館古典総合データベース、各種翻刻校訂資料、さらに関連する既存の研究文献から、文化史的記述や社会言語学的分析に必要な事例を渉猟し利用している。研究文献には、評者の松浦静山旧蔵蘭書の書誌的研究（二〇〇〇）や佐賀藩旧蔵洋書目録復元目録（二〇〇二）も含まれている。

評者としては、本書を通読して目にとまった事例や問題点を章ごとに取り上げ、見解を加えることで責めを塞ぎたい。

本書はプロローグ（序章）と本論全八章およびエピローグ（終章）、文献目録、一次資料和書名（漢字表記添え）、非和漢人名、和漢人名（漢字表記添え）、事項・地名索引からなる。漢字知識がない読者にも配慮し、本文および脚注における漢字表記は希少である。漢字あるいは漢字かな交じり文の挿入には英訳を添えている。プロローグの前に、採用した日本語のローマ字表記法、日本語固有の特殊用語解説を置く。英文研究書ならではの配慮である。

本論全八章の章題を訳せば、次の通りである。主に文化史的な記述からなる章には（文化史）、主に社会言語学的な記述からなる章には（言語学）のラベルを付す。

第一章　日本におけるオランダ語既習得者たち　（文化史）
第二章　徳川日本におけるオランダ語学習　（文化史）
第三章　日本におけるオランダ語使用の多様性　（文化史）
第四章　言語接触　（文化史）
第五章　オランダ語テキストにおける言語干渉　（言語学）
第六章　オランダ語からの翻訳　（文化史）
第七章　オランダ語による日本語の語彙的、統辞的、表記的干渉　（言語学）
第八章　言語移行と言語後退　（文化史）

「第一章　日本におけるオランダ語既習得者たち」について

一六〇〇年四月、漂着船リーフデ号の乗組員生存者十八名のうち、イギリス人ウィリアム・アダムズ（のち三浦按針）以外はすべて北オランダ出身のオランダ人であった。本章において、著者はオランダ語既習得者をオランダ人、オランダ人以外の西欧人、日本人以外の非西欧人に三区分し、区分ごとに日本語学習例を二次資料に依拠しながら、ほぼ時代順に記述する。平戸商館に雇用され最初の日蘭両語の通訳となったリーフデ号乗組員の名を本文では（De Lange 2006）によって、Jan Cousynen（ヤン・カウセネン）とし、脚注では Viallé and Cryns（2018）の読み Cousynsen（カウセインセン）を示すが、両論併記の形だ。平戸商館文書の難読さを想起させる。

オランダ語既習得者たちは、出島に商館が移ってからは日本語学習が禁止され、商館雇用の通訳も廃止され、長崎奉行所の監督する

日本人通詞と、はじめ「数十年」（著者による）は主にポルトガル語で、ついで幕末までもっぱらオランダ語によって接触するようになる。そのなかで日本語を学んだ「傑出した」オランダ人商館長として、著者は朽木昌綱やオランダ通詞たちとオランダ語で文通したティチングと蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」を編纂したドゥーフ、日本語文法書を著した最後の商館長ドンケル・クルチウスを挙げる。

また、ドイツ人商館長クライエル（在任一六八二～一六八三、一六八四～一六八五）を挙げ、オランダ語で商館長日誌や書簡を書き、個人的に同胞のゲオルグ・マイスターを雇用したと記載する。言語接触をテーマにする本書でマイスターの名を挙げながら、その重要な著作『東印度の庭師』（ドレスデン、一六九二）には言及がない。収録された日本人との会話録はドイツ語で書かれたため、無視されたかも知れない。

日本人以外の非西欧人として、オランダ商館の使用人（ジャワ人）や奴隷（マレー人）が挙げられる。著者は、彼らはオランダ東印度の現地人の間で広域通用語であったクレオール化した植民地ポルトガル語（Low Portuguese）を使用し、片言のオランダ語を混ぜて話したと推定する。脚注では、司馬江漢に依拠して、奴隷が日本人から「黒んぼ」と呼ばれたことを指摘する。[3] 評者としては、松浦静山が商館長ロンベルフの従僕ドル（十七歳）に書かせた「マレー文字」を、オランダ通詞・本木良永に解題させて、愛蔵していたことを付け加えたい。[4]

「第二章　徳川日本におけるオランダ語学習」について

本章では主としてDe GrootやWolfgang Michelの業績に依拠して、オランダ通詞、蘭学者のオランダ語学習の事例、「知識交流の場」（loci for Intellectual Exchange）、私塾、ついで、オランダ語学習の教材（単語帳、辞書、文法書）の移入・発達史が記述される。

出島商館時代の初期（一六四一～一六七〇）のオランダ通詞として、ポルトガル語、オランダ語両語に通じた秀島藤左衛門と西玄甫、オランダ語に優れた志筑孫兵衛の事績を述べた後、著者は一六七〇年代から、しばしば長崎奉行が通詞のオランダ語力向上のために通詞に研修を命じたにもかかわらず、なかなか向上しなかった原因として、発音練習にカナ文字を使用したこと、通詞が世襲職であったこと、語句の暗誦に終始し文の構造を理解させなかったこと、さらに通詞仲間のギルド的な秘密主義をDe Grootによって挙げる。著者はその秘密主義をもってオランダ語が「クリプトレクト」（cryptolect、秘密語）であったとし、ポルトガル語使用が強固であったことも、オランダ語力不足の原因に加える。

商館医ケンペル（滞日一六九〇～一六九二）に助手として雇用され、ケンペルからオランダ語の読み書き・文法の特訓を受けた今村源右

衛門が例外的存在であったこと、オランダ通詞のオランダ語能力の低さが歴代商館長の悩みの種であったことは、よく知られている。

「知識交流の場」として、将軍家侍医桂川家のサロン「和蘭座敷」、長崎の吉雄耕牛宅の「紅毛座敷」を挙げるが、大槻玄沢『西賓対晤』から片仮名表記やオランダ語の諺を引用しつつ、玄沢ら江戸の蘭学者や蘭癖大名が通った長崎屋はわずかに、芝蘭堂に近いことだけが（Hesselink 1995）によって示され、「知識交流の場」としての記述はない。

蘭学塾として、玄沢の芝蘭堂の次に、（Screech 1996）により、門人六百人余を数えた耕牛の私塾を挙げるが、その私塾名「成秀館」は欠落している。蘭学塾の嚆矢として筆頭に挙げるべきである。芝蘭堂の語義については、優秀な門弟が輩出する塾、あるいは徳化を受ける塾という普通の解釈が示されていない（本書七五頁 注71参照）。鳴滝塾（シーボルト）、大観堂（高野長英）、日習堂（坪井信道）、象先堂（伊東玄朴）、適塾（緒方洪庵）を列挙するなかで、仙台藩の医学館（佐々木仲沢）を（Goodman 2013）から引用する。しかし、これは私塾ではない。むしろ、長英に蘭学を学んだ内田五観の数学塾「瑪得瑪弟加（テマテカ）」塾が紹介されればよかった。

オランダ語学習の教材は、単語帳として今村源右衛門『和蘭称謂』、新井白石『外国之事調書』、十七世紀後半から十八世紀初頭に長崎で作成された一連のイロハ引き医薬用語集いわゆる「阿蘭陀口書」、青木昆陽『阿蘭陀文字略考』『和蘭文訳』を紹介する。ついで、舶載辞典として、Halma、Marin の各蘭仏辞典、Meijer の Woordenschat（辞学宝函）、舶載の文法書として、朽木昌綱がティチングから入手した Marin（1752）、Cornelle（1783）の各蘭仏対訳文法、Moonen（1706）の蘭文法、志筑忠雄が西洋文法研究開拓に利用した Sewel 蘭文法（1708）、幕末に写本、復刻によって普及した Siegenbeek の文法書 Grammatica（1822）と Syntaxis（1810）、Weiland の蘭文法を挙げる。

Siegenbeek の両文法書は、ラテン語文法に基づく古風なオランダ語例文ばかりで、現用オランダ語を学べない（八五頁）、との指摘はもっともだが、漢学で育った蘭学生が西洋文法の骨格を学ぶのに適した面もある。

蘭学者の著した教材として、大槻玄沢『蘭学階梯』（一七八八）、森島中良『蛮語箋』（一七九八）、箕作阮甫『改正増補蛮語箋』（一八四八）、辞書として稲村三伯『ハルマ和解（江戸ハルマ）』（一七九六）、その縮約版である藤林普山『訳鍵』（一八一〇）、商館長ドゥーフが十一名のオランダ通詞と共同して編纂した『ヅーフ・ハルマ（長崎ハルマ）』（一八一一～一八一七未完、一八三四成）、馬場貞由『蘭語訳撰』（一八一〇）、大江春塘『バスタード辞書』（一八二二）、『ヅーフ・ハルマ（長崎ハルマ）』の校訂版である桂川甫周刊『和蘭字彙』（一八五五～一八五七）を記述する。

『蘭学階梯』と『蛮語箋』を論じる場合、両者が長崎のオランダ通

詞の蘭語学習法や職業的な必要から作成した種々の単語帳を典拠（種本）にしているため、通詞の言語生活に使用される語彙（唐話語も含めて）の多いことは指摘されるべきである。また、著者は（Twine 1991）によって、『蘭語訳撰』の口語的語彙と文法を指摘するが（七四頁）、本書は節用集を範に取り、蘭学者や蘭学生が蘭文を書くために編纂された日蘭分類語彙であることを忘れてはならない。[5] 著者がその組版と参照の複雑性を指摘する（七九頁）のは当たらない。

『バスタード辞書』の典拠を Meijer の Woordenschat 第十一版（Dordrecht, 1805）とするのは誤りで、正しくは第六版（Amsterdam, 1688）の第一部「外来語」（bastaardr-woorden）である。Halma や Marin の蘭仏辞典は見出し語が双解され、フランス語知識なしに簡便な蘭々辞典として使用できるが、その見出し語はほとんど純粋なオランダ語からなり、外来語は排除されているため、Meijer 第一部の需要があったのである。この需要は幕末に盛んに舶載された Weiland の術語辞典（Kunstwoordeboek）につながるものである。フランス語やラテン語からの借用語に満ちたこの術語辞典は幕末の科学技術導入に重要な役割を果たしたが、本書では触れられていない。

蘭学者が著した文法書として、志筑忠雄『和蘭詞品考』（一八〇四か）と志筑の弟子・馬場貞由の『和蘭文範摘要』（一八一四）、藤林普山『医門須知和蘭語法解』（一八一一）と飯泉士譲『和蘭文典字類前編』（一八五六）を重視するのは当然であるが、「和蘭語法解（おらんだごほうげ）」を Orandago hōkai とするのは誤りである。その馬場貞由のオランダ語序文の主旨は、著者の藤林普山を蘭文法の開拓者である師・中野柳甫（志筑忠雄の蘭語学者としての別名）の門流に位置づけ、蘭学生を導く松明として『和蘭語法解』を推薦することにあるが、著者はこの主旨を伝えていない。序文中の「meester N. liuho」（中野柳圃先生）や「Liuhoaanse leerregel」（柳圃の門流）の語句を見落としたようだ。索引の志筑忠雄に中野柳圃の別名が欠落している。

「第三章　日本におけるオランダ語使用の多様性」について

オランダ通詞の会話能力は一般に低く、「内通詞」と呼ばれる商館の私的な日本人使用人の方がオランダ通詞よりも会話能力が高かったことが、商館長や商館員の著作や書簡からの引用によって指摘される（九四頁）。これは重要な指摘である。オランダ通詞の仕事は文書の翻訳が中心であったからである。商館長ティチングが会話能力を評価した通詞として名村元次郎と堀門十郎が紹介される。通詞が公式文書でしばしば自分の名前をローマ字で署名した例として Motogi Enosin（本木栄之進、本木良永）、Namoera Katsemon（名村勝右衛門）の二つを（Screech 2006）から紹介している。しかし、本書では NaBa Ziubij（楢林重兵衛）、N.S. Jeyzajemon（西栄左衛門）のように姓

を略表記する方式は触れられていない。

ポンペがオランダ語で講義を行い、それを「ある長崎の通訳者」（a Nagasaki interpreter）が翻訳し、その翻訳をポンペの門人・松本良順が写して、他の生徒に広まった、との記述は必ずしも正確ではない。ポンペ筆のオランダ語講義録をもとに翻訳がおこなわれたのであり、そのオランダ語講義録もポンペの高弟たちによって筆写され広まったのであった。読者は a Nagasaki interpreter を長崎通詞と誤解しかねないが、実際はオランダ語に優れた門人・司馬凌海であった。

日本人の文法的に優れた蘭文書簡として、将軍家侍医・蘭学者であった桂川甫賢（国寧）の大槻平次郎（磐渓）あて書簡（早稲田大学図書館所蔵）が「FIGURE 8 A letter from Katsuragawa Hoan to Ōtsuki Bankei（1827）WUL 文庫 08 B0183」とのキャプションを付けて、カラー写真入りで紹介されている。本書で、桂川甫賢に一貫してその幼名 Hoan（甫安）を使用するのは理解に苦しむ。

日本人のオランダ名使用例として挙げられる馬場貞由（佐十郎）の Abraham は、（Goodman 2013）によって商館長ドゥーフが与えた名前とするが、これは間違いである。商館員たちが佐十郎を Abraham と呼んでいた、とドゥーフが回想録で述べている。

本章で例示される「オランダ語使用の多様性」は実に多方面にわたる。摘記すれば、森島中良『紅毛雑話』、大槻玄沢『蘭説弁惑』、司馬江漢『西遊日記』などの著作に見られる仮名書きのオランダ語、石川大浪、司馬江漢、浮世絵師・英泉、佐竹義敦、北山寒巌、川原慶賀、亜欧堂田善などの絵画作品のオランダ語サイン、出島医師フェイルケ筆富士山図のドゥーフ蘭文賛、磯野文斎『長崎土産』シリーズや長崎絵（冨嶋屋、文錦堂）に印刷されたオランダ語、笹屋製プラケットの蘭文、有田焼やコンプラ瓶のオランダ文字、長崎悟真寺のデュールコープの墓や掛川[6]のヘンミイの墓に刻まれたオランダ語碑文、北島見信『紅毛天地二図贅説』、本木良永『阿蘭陀地図略説』、朽木昌綱『泰西輿地図説』、橋本宗吉『喝蘭新訳地球図説』など地図や地理書、また朽木昌綱『西洋銭譜』の地名・国名表記、佐賀藩や松浦静山収集の蘭書目録[7]の書名、朽木昌綱の注文蘭書名、などである。

本章の結論において、著者は徳川日本におけるオランダ語使用の状況をバフチンの用語を借りて、ヘテログロシア（異言語併用）と呼びながら、同時代に漢文が文化的・知的言語として支配的であったため、オランダ語使用を過大評価しないこと、と自戒している。評者としては、本書の第六章への評語にもなるが、ほとんどが儒医出身の蘭学者の知的世界は基本的に、漢蘭折衷的であったことを指摘したい。著者は漢蘭を競争関係にあったと捉えるが、実態から離れている。それでは蘭文の漢訳を基本とした蘭学者の営為を説明出来ない。

「第四章　言語接触」について

本章では徳川日本におけるオランダ語と他言語（日本語・ポルトガル語・文言・漢文・英語・フランス語・ロシア語・ラテン語・マレー語・満州語など）との接触と競合の事例が、他言語ごとに、社会言語学的というよりは文化史的に列挙される。

まず、（Blussé et al. 1992）などにより、オランダ人の日本語学習が公的には禁止されていたため、日本語に通じたオランダ人は国外追放に遭ったことを指摘する。公的な禁止にもかかわらず、十八世紀以降、日本語を学んだ商館長として、通詞が故意にオランダ語に訳さなかった日本語を理解していたティチングを（Lequin 2011）によって挙げる。また、京都祇園二軒茶屋の名物、豆腐切りをみて、ローマ字で「稲妻の腕（かいな）を借らん草枕」の名句を残した商館長ドゥーフを、（Vos 1989）により挙げる。

ポルトガル語との競合は、一六三九年のポルトガル人追放後も続いたことは、一六五三年大目付の井上政重が商館長コイエットに、ドドネウス『草木誌』オランダ語版をポルトガル語に翻訳できるオランダ人がいないか、尋ねた事例で端的に示される（一五七頁）。ポルトガル語が広域通用語（ＬＷＣ）として支配的であった原因として、著者は第一に、オランダ人来日以前、五十年間、ポルトガル語が日本人と西欧人とのコミュニケーション語として定着していたこと、第二に、商人の言葉であるオランダ語に対して、ポルトガル語が宣教師の言葉として権威を保ったこと、第三に、オランダ人はポルトガル人に比して、自国語の普及に熱心ではなかったこと、第四に、ポルトガル語からオランダ語へ転換することが通詞には難しかったこと、を挙げる。評者はポルトガル人追放後もポルトガル語が支配力をもったことを直接示すポルトガル通辞資料を知らない。本書もオランダ側の間接的な証言にもっぱら依拠している。ポルトガル語・ラテン語・オランダ語交じりのカナ書き医薬語集の成立とポルトガル通辞の関係は必ずしも明らかでない。

ラテン語との競合の例として挙げられるのは、ケンペルがバタヴィア総督ファン・アウトホールンやアムステルダム市長ニコラス・ウィトセンに宛てたラテン語書簡である。ここで評者が想起するのは、西欧知識人がラテン語と自国語あるいは近代諸語を併用したのは通例であって、むしろ出島では例外であったこと、ギリシア語の素養があったのは評者の知る限り、ティチングの後任商館長ファン・レーデ・トット・デ・パルケレールのみであったこと、吉雄耕牛はヘブライ語にまで関心を寄せたこと、オランダ通詞で漢学の素養があったのは松村元綱と本木良永であり、漢詩を残したのは松村元綱の他は知らないこと、志筑忠雄はたしかにケンペル鎖国論の翻訳で、ウィルギリウスの詩句を漢訳したが、松村元綱ほど漢学

には通じていなかったこと、である。

著者は松浦静山旧蔵のプリニウス『五巻本博物誌』オランダ語版（一六六二）がキリスト教的な改訳であることを指摘し[88]、キリスト教禁教下で静山がキリスト教的内容の、しかもアダムとイブの楽園図を口絵に持つこのプリニウス博物誌を入手したことを重視する。しかし、静山の求めで松村元綱が翻訳した「フリニウス略解」では、原著の博物学的情報のみが抄訳され、キリスト教的な部分は完全に無視されている。

日本人のラテン語との接触は、地球図や地理書のラテン語地名・国名、植物書の学名、とくにリンネ二名法が重要である。著者も本木良永や桂川甫周の地理研究、曾槃『成形図説』と伊藤圭介『泰西本草名疏』『日本産物志』の例を挙げる。伊藤圭介の著作にみえる漢名、学名、片仮名表記の和名の共存を捉えて、大槻玄沢の著作と同様に、ヘテログロシア（異言語併用）と呼び、圭介のリンネ二名法採用を進歩と評価する。

マレー語は出島のアジア系奴隷が話していた言葉であり、オランダ人相手の遊女（阿蘭陀行き）もマレー語とオランダ語を交ぜて話していたことが指摘される。

文言・漢文とオランダ語を基本的に競合関係として捉える著者は、「もし中国語（文言・漢文）が学問語でなかったら、オランダ語は蘭学（西洋知識）のための媒介言語としてうまく機能しただろうか」（一七七頁）と自問し、学問語としてそれほど競争せずにすんだ面もあるが、一方で、漢学者によって学問語として採用されたほどの成功はおさめなかっただろう、と自答する。評者からすれば、歴史を無視し、漢蘭折衷という蘭学の基本的性格を無視した愚問といわざるを得ない。蘭学塾における漢蘭折衷教育、とくに厳密なオランダ語原典講読と漢文学習を厳しく課した坪井信道塾が蘭学の本流であったことを指摘したい。

朝鮮語については、シーボルト『日本』における朝鮮語研究や朝鮮語資料の収集が言及される。アイヌ語については特に、シーボルトが関与した蘭日アイヌ語辞典（ライデン大学図書館、Ser. 95）と独日アイヌ語辞典が紹介され、前者は馬場貞由、後者は最上徳内の編著として分析されているが、評者はアイヌ語を知らない上に、原資料を見ていないので評語は差し控える。

ドイツ語については、（Michel 1986）によって、一六五〇年に来日したドイツ兵カスパル・シュマルカルデンが帰国後に編纂した独日語彙集が紹介されるが、上述のように、ゲオルグ・マイスターの日本語学習は記載がない。評者としては、ここで林子平が長崎で吉雄耕牛の所蔵本を目撃し、『海国兵談』に引用した「ケレイキスブツク」すなわち、ディリヒ『戦争書』（W. Dillich, *Kriegsbuch*. Frankfurt am Mayn, 1689）を挙げておきたい。

ロシア語については、大黒屋光太夫のもたらしたロシア算書（早

稲田大学所蔵）、桂川甫周『北槎聞略』、馬場貞由、村上貞助、榊礼輔のロシア語研究が紹介される。吉雄耕牛旧蔵の『新旧ロシア帝国誌』は著者の幕府旧蔵蘭書調査報告の成果として一八七～一八八頁の注79に書誌的紹介がある。端本であることの指摘はよいが、書店主を著者と誤って、Johannes Broedelet, *Oude en nieuwe staat van 't Russische of Moskovische Keizerrijk.* と記載し、刊年も発行地も示さない。正しくは J.F. Reitz, *Oude en nieuwe staat van 't Russische of Moskovische Keizerrijk.* Utrecht, Johannes Broedelet, 1744. 4 vols in 2. 4to. である。前野良沢がロシア研究のために抄訳した原典であることに言及がない。

フランス語については、朽木昌綱がティチングから入手したクノール『貝譜』、サンソン『新世界地図帳』のフランス書、マーリン『新仏蘭会話教程』、コルネル『簡約フランス語学習』の会話書、つづいて松浦静山旧蔵フランス書ド・マロール『ミューズの神殿図誌』に続いて、ハルマ『蘭仏辞典』、本木正栄『払郎察辞範』、商館長ドゥーフのフランス語使用、村上英俊の『三語便覧』とフランス語塾達理堂、福山誠之館旧蔵キリアヌス『蘭羅仏対訳辞典』、沼津兵学校旧蔵仏英辞書、幕府開成所刊行のフランス語教本などが記載される。ハルマをユグノー難民（Huguenot refugee）とするのは誤りである。本木正栄『払郎察辞範』はマーリン『新仏蘭会話教程』の翻訳であるが、対訳のオランダ語を訳したにすぎず、正栄はフランス語を学習していないことを指摘しておきたい。

英語については、本木正栄『諳厄利亜興学小筌』および『諳厄利亜語林大成』、メドハースト『英和・和英辞彙』に続いて、一八五九年に長崎で出版された匿名の *A New Familiar Phrases of the English and Japanese Languages* を記載する。この会話書は、本木昌造著『和英商賈対話集 初篇』（一八五九年十二月塩田幸八刊）のはずであるが、稀覯本であるためか、著者は直接原本に当たっていないようで、著者名も日本語書名も欠落している。

本章の結論において、著者は一六三九年のポルトガル人追放後も、オランダ語の競合言語としてポルトガル語が優勢を保ったこと、十九世紀初頭の対外危機から、日本人はオランダ語以外の英仏露語を学習し始めたが、学問語としてオランダ語にもっとも競合したのは「あらゆる種類の文言」（all varieties of literary Sinitic）であり、それにもかかわらず、蘭学発展の背後にいたのは「漢文の読解と翻訳に習熟した学者たち」（scholars trained in the reading and translating Chinese texts）であった、とする。しかし、あくまで漢蘭を競合関係で捉え、この「学者たち」の具体名や著作、蘭学者による蘭文漢訳の例が示されないため、評者には疑問が残る。

「第五章　オランダ語テキストにおける言語干渉」について

本章ではこの書評の「はじめに」で述べた「コード・スウィッチ

ング」「ギャップ・フィリング」の他に、社会言語学的事象として「音韻的干渉」「語形的統合」も加えて、オランダ商館日記、ティチングが離日後に出島商館長・商館員、朽木昌綱やオランダ通詞たちと交わした蘭文書簡、オーフルメール・フィッセル『日本風俗備考』などの材料から、それぞれの事例を、ラテン語、ポルトガル語、種々のシナ語（Sinitic Varieties）、マレー語、などの接触言語ごとに抄出列挙する。

「コード・スウィッチング」の例を和訳とともに挙げれば、以下のごとくである。

ラテン語：Adij（本日）　demptis（を除いて）　in omnibus（こぞって）　vale（さらば）

ポルトガル語：fidalgo（貴族）　cappados（宦官）　pancado（白糸の定価）

シナ語：sampan（三板）　joncq（ジャンク）

マレー語：koelie（クーリー、苦力）

「音韻的干渉」として顕著なものは、Firando（平戸）、Finda（飛騨）、Yendo（江戸）、Nangasaki（長崎）など、-g, -d の前で母音が鼻音化する例が挙げられる。

日本語への「コード・スウィッチング」としては、ティチングの書簡から、

Jedo den 1 Rokguats van het 6 jaar der Nengo Tenmy（年号天明六年六月一日江戸）

藤林普山『和蘭語法解』への馬場貞由のオランダ語序文の日付、

Den vijf en twintigste van fatiguats in het jaar boenkwa twaalfde（文化十二年八月二十五日）

伊藤圭介『泰西本草名疏』のオランダ語標題紙の刊記、

Te NAGOJA, By BOENZY XI. (1828.)

が挙げられる。この刊記は By のあとに書店名が欠落しており、「文政十一年（一八二八）　名古屋　（　）書店」を意味する。

日本語の「発話引用」の例として、商館長日記一六四七年一月の大目付・井上政重の発話、

Capitaijn Woiensamma fumbeets sinday mimaistra!（上様分別次第見舞した）

オーフルメール・フィッセルからは、

Oeidi di gozarimasi（お出でで御座ります）

を引用する。

日本語の「諺の引用」例として、著者はティチング書簡を重視する。すなわち、ティチングが長崎奉行への不満をかこつ日本の友人たちについて、通詞の堀門十郎へ、「tokakoe oekijo wa mama naranoe」（とかく浮世はままならぬ）、「Aketje no tenka mika」（明智の天下三日）と書き送った例や、朽木昌綱あてにアムステルダムから、一八〇七年六月四日付けで、「Itsoe wari wo fito ni wa i ute tsoe mi no besi kokoro

no towaba ikaga kotai in」（偽りを人には言ふて罪延べし心の問はばいかがこたへん）と書き送り、昌綱の座右の銘「genko mattakf seijo」（言行全くせよ）を付け加えた例である。ともに愛好する諺を交わすことで友情を堅固にするという著者の解釈に、評者も同意するが、最後の座右の銘を二二五頁注37で、「言行全（く）正常」という誤った読みをしているのは拍子抜けする。

「ギャップ・フィリング」の例は実に豊富に示されているので、部類ごとに若干を抄出するにとどめよう。

楽器：samsi（三味線）　samsiespeelsters（三味線引きの女）

銭貨：een Itzebo（一分）　Oobang（小判）　Oobang（大判）

度量衡：eenige ikies（数間）　mangock（万石）　catty（カティ、一・二五アムステルダムポンド）

衣服・持ち物：catabers（帷子）　kappakagos（合羽籠）　gatane（刀）

飲食物：sackana（肴）　chiaa（茶）　sum（広東人参）　Tiabinto（茶弁当）

乗り物：hayafune（早船）　coebaij（小早）　Fioosmaar（日吉丸）

その他の品物：Fatsenbacks（挟箱）　Goza（莫莚）

宗教：bonzo（坊主）　Jamabosi（山伏）

称号：dayrie（内裏）　sjogoen（将軍）　Okinocami（隠岐守）　TaijiCoo（太閤）

役職・職業：ottona（乙名）　bongios（番衆）　Keesje(n)s（傾城）　ondertolken（小通詞）　tolkencollege（通詞仲間）

祭：bon（盆）　Sitsiseki（七夕）

地名：Faconies gebergte（箱根山）　Fiseeng（肥前）

「語形的統合」（Morphological Integration）の例を摘記しよう。

複数：jammabosen（山伏）　nagamoetsen（長持ち）　fabitaas（羽二重）

指小辞：sioubackens（小型の重箱）　kockiens（石）　barckxkens（小舟）

属格・形容詞：eenige Firandoos porcelein（平戸焼き数個）　een stel Miacosche knoopen（〃ヤコの釦一組）　Nankijnse joncken（南京船）

国民：Japanner（日本人）　Japanders（日本人）　Nankinders（南京人）

「第六章　オランダ語からの翻訳」について

著者は本章において、近世ヨーロッパの翻訳文化論（Burke 2007）に範をとって、日本において、誰が（訳者）、何を（知識の分野）、誰のために、如何に（翻訳方法）、オランダ語からの翻訳を行ったか、その結果は知識・政治・言語にどのような影響をおよぼしたか、を

文化史的に考察する。

まず、十七世紀の主な訳者と訳書は、沢野忠庵（フェレイラ）『阿蘭陀流外科指南』、オランダ通詞猪俣伝兵衛によるカスパル・スハンベルガー口伝書、大目付・井上政重によるプリニウス、ドドネウスの注文、向井元升と嵐山甫庵のオランダ外科研究、北条氏長のユリアン攻城法、本木了意のレメリン解剖書翻訳、十八世紀は楢林鎮山『紅毛外科相伝』、今村源右衛門のケイズル馬書、本木良永と北島見信の世界地理書、吉雄耕牛の馬文耕『厳秘録』蘭訳（伝わらず）、新井白石『采覧異言』、前野良沢らの『解体新書』、大槻玄沢のヘイステル外科書訳、宇田川玄随訳ゴルテル『西説内科撰要』、宇田川玄真『遠西医範』および『遠西医方名物考』、宇田川榕菴『植学啓原』、志筑忠雄『暦象新書』、十九世紀は馬場貞由の蛮書和解御用（ショメール百科事典翻訳）、高野長英『医原枢要』、緒方洪庵『扶氏経験遺訓』、小関三英『泰西内科集成』が列挙される。

こうした翻訳の流れはオランダ通詞本木家を中心とする長崎蘭学と宇田川家を中心とする江戸蘭学に分けられ、社会階層的には、特に小関三英が農民出身であることに注目する。宇田川塾出身の坪井信道が開塾し、緒方洪庵らが入門した蘭学塾・日習堂の重要性には触れていない。

翻訳の分野は医学が重きをなし、江戸時代のオランダ語からの翻訳書、約千点の約半数を占めることを指摘した上で、分野別に著者が重要視する書物が考察される。すなわち、博物書として、ヨンストン『動物誌』とドドネウス『草木誌』を挙げ、次に理化学書として、最初に平賀源内『火浣布訳説』を挙げ、（Goodman 2000）によってその典拠がウォイト『医薬辞典』のアスベスト項目とする。評者としてはウォイトがオランダ通詞や蘭学者の必備書として広範囲に普及したことが重要であることを指摘しておきたい。著者は（Tsukahara 2002）によって、化学分野で日高涼台や藤林普山が宇田川榕庵と同時代にすぐれた翻訳をおこなったことを指摘している。

天文・地理学書として、本木良永、司馬江漢、松村元綱、桂川甫周らの天明寛政期の仕事を挙げたあと、いきなり箕作阮甫『八紘通誌』（一八五一）に飛び、志筑忠雄『暦象新書』（一八〇二）、吉雄南皐（常三）『西説観象図説』（一八二三）には言及しない。

歴史書・政治書としては、小関三英『那波列翁伝』（一八三七）と本木正栄『軍艦考例』（一八〇八）、大塚同庵『和蘭官軍抜隊龍学校全書』（一八五五）をあげる。『軍艦考例』の典拠をオランダ、フランスの資料としているが、正しくはユトレヒトの書店主 Kornelis Kribber（1739–1780）発行の一枚刷り銅版図である。

著者は総合的・一般的な内容の翻訳書として、森島中良『紅毛雑話』（一七八七）と蛮書和解御用の成果である『厚生新編』（一八一一～一八四六）を同列に扱うが、賛同しかねる。『紅毛雑話』は桂川家サロンの共有していた西洋文化情報を総合したもので、原拠となっ

た蘭書は多様である。一方、『厚生新編』の原典である七巻本ショメール百科事典オランダ語版は、フランス語初版（一七〇九）の編者ショメール（Noël Chomel, 1633–1712）の名前を冠しているが、内容的にはオランダ人ド・シャルモ（J. A. de Chalmot, 1734–1801）がフランス百科全書および関係の専門書をもとに編纂した啓蒙的な百科事典であった。しかも、著者は『厚生新編』の翻訳目的は「西欧の全知識」（'all' Western knowledge）の摂取であったとするが、実際には、蘭学者たちが「利用厚生」の立場から、意図的に医薬・本草・農業関連項目を中心に選択して、翻訳を分担し、アルファベット順によらず、伝統的な類書形式に編纂したのだった。

次に、学術書とは別に、行政・法制・通商関係文書の翻訳として、オランダ商館が将軍および長崎奉行のために海外情報を編集した報告書、いわゆる和蘭風説書（一六四一～一八五九）およびアヘン戦争以降、追加された別段風説書を挙げる。幕末、一八六〇年代に蕃書調所で翻訳発行した『バタヒア新聞』もこの流れに位置づけている。また、（Verwayen 1996）によって、水野忠邦の命令に始まるオランダ法律書が幕末まで続けられたことを指摘する。

フィクションの翻訳として著者が注目するのは、デフォー『ロビンソン・クルーソー』の翻訳と神田孝平・訳『ヨンケル・ファン・ロデレイキ一件』である。『ロビンソン・クルーソー』の最初の日本語訳に言及し、ついで横山由清『魯敏孫漂荒紀略』を挙げながら、最初の翻訳者（黒田麹廬）も訳書名（漂荒紀事）も記載していない。かつて、そのオランダ語原典を確定し、翻訳成立史を解明した評者[9]としては残念である。

誰のための翻訳か。著者は幕府のための翻訳として和蘭風説書、別段風説書、本木正栄『軍艦考例』を、自分のための翻訳として、志筑忠雄『鎖国論』、神田孝平『ヨンケル・ファン・ロデレイキ一件』を挙げるが、評者としては、黒田麹廬『漂荒紀事』も後者の例に加えたい。『解体新書』は訳文が「日本語ではなく、漢文であった」ため、普及しなかった、という著者の見解にはとても賛同できない。クルムス『解剖図表』の漢訳『解体新書』は学術書としてごく普通のことであり、想定された読者は知識人であった。知識人にとって漢文は漢字文化圏の共通言語であると同時に、訓読によって日本語としても機能したのである。

翻訳方法について、著者は共同訳の例として、本木良永・松村元綱『阿蘭陀地図略説』および『阿蘭陀地球図説』、前野良沢らの『解体新書』をあげる。また、翻訳・義訳・直訳の区別も指摘する。その具体例のひとつとして、著者は松浦静山旧蔵蘭書のひとつ、書評誌『学者の共和国』（アムステルダム、一七一〇～一七一二、一七四〇～一七五五、一七六三～一七七一の不揃い本三十七冊）のオランダ語タイトル、*Het Republijk der geleerden* の解題「学者之会読」に注目する。この解題は依頼した松浦静山自身が述べているように、オランダ通

詞・志筑善次郎によるものだが、著者は解題者を志筑忠雄と誤解し（二九二頁）、「共和国」の概念のない「志筑忠雄」が身近な「会読」文化をもとに「学者之会読」と訳したことをもって、異文化翻訳の好例と評価している（二九五頁）。しかし、会読は古典を対象とするものであり、近代的な書評誌のタイトルにそぐわないことを指摘しておきたい。

翻訳の大多数が刊本ではなく、写本で流通した原因について、著者は『鎖国論』を例にあげて説明する。幕府の対外政策からして刊行は考えられない（Boot 2008）と。しかし、『鎖国論』が『異人恐怖伝』（一八五〇）のタイトルのもと、鎖国肯定論として刊行され流布した事実も指摘する必要がある。翻訳医学書の刊行は漢方医から反対されたとか、訳者が刊行を好まなかったとか、秘伝扱いしたとか、の理由が指摘されている。しかし、評者は、江戸期あるいは明治中期頃まで、読書人の読書とは筆写と同義あるいは同時並行的に行われるものであったことを指摘したい。すなわち、漢籍も蘭書もまず筆写から読書が始まったのである。

翻訳が知識・政治・言語に及ぼした影響について、著者はまず、知識面で、海外知識の増大と漢方の権威失墜、地動説・リンネ二名法の普及による世界観の転換、『眼科新書』によって西洋医学の優位性が認められたこと、在村蘭学による知識の普及、中国とは異なり、蘭学が日本人を近代へ準備したこと、を指摘する。

次に政治面では、蘭学者と儒者・幕府官僚を対立的に捉え、シーボルト事件（一八二九）、蛮社の獄（一八三七）を両者の対立として説明する。しかし、開国から長崎海軍伝習に至る幕府の開明政策と佐賀藩を先頭とする諸藩の蘭学導入には触れていない。

「第七章　オランダ語による日本語の語彙的、統辞的、表記的干渉」について

本章では、最初に、オランダ語による語彙的干渉として、日本語におけるオランダ語起源のいわゆる外来語や翻訳語を、次に、統辞的干渉として、関係代名詞の訳語「ところの」、受動文の動作主を示す前置詞 door の訳語「によって」、繋合動詞 zijn の訳語として訳文の末尾に使用される「である」などの表現を、最後に、書字的干渉としてローマ字使用を、それぞれ既存の研究成果を要約して紹介する。

オランダ語起源の外来語・翻訳語は、接触移入語（contact-induced words）の概念で捉え、約千語の接触移入語をリストアップし、新たに社会言語学的に分析し、その成果を一覧表にまとめている。ここでは、著者作成の一覧表の各下位区分から代表的な語を一～二語選び、簡略な表に縮小して全体の構造を示す。用語の和訳は評者の仮訳である。

単語借用（lexical borrowing）

借用語（loanwords）　三六一語

純粋借用語（pure loanwords）　三一五語

植物（六三語）：アカシア

化学（八〇語）：ガラス

飲食（二〇語）：コーヒー

数学（二語）：コンパス

医学（三五語）：チフス

理学（二七語）：レンズ

航海（一一語）：マドロス、マスト

工学（二一語）：ダライ（旋盤）、ポンプ

出島職名（七語）

雑（四九語）：インク、ペン、シナ

混合借用語（loanblends）　四六語

植物（六語）：アロエ軟膏、コルク樫

化学（一八語）：ライデン瓶、炭酸ガス

医学（六語）：アキレス腱、リンパ腺

雑（一六語）：缶詰、ズック靴

転用（loanshifts）　一二七語

拡大転用（extensions）　五語（秒、カピタン）

翻訳転用（loan translations, calques）　一二二語

化学（三二語：窒素、元素）

文法（一一語：代名詞、冠詞）

医学（五三語：母斑、鼓膜、病院*）

理学（一七語：引力、重力）

雑（九語：乳酸、植民*）

現地造語（native creations）　八五語

純粋現地造語（purely native creations）　二二語

雑（一六語：望遠鏡、大気、鎖国*）

星座（六語：白羊宮、人馬宮）

混合造語（hybrid creations）　四七語

飲食（三語：ジャガ芋、レンズ豆）

オランダ（三五語：オランダ芹、オランダ行）

蘭（一〇語：蘭学、蘭方）

ヤエス-（二語：八重洲地下街、八重洲北口）

雑（七語：ガス台、ゴム印）

外国語形態素（二〇語：アロエクリーム、ブリキ缶）

上例中、アステリスクを付けた「病院」「植民」「鎖国」について、評者の見解を述べよう。著者は（Vos 1963）によって、「病院」の訳語を挙げ（三九一頁）、注62において、森島中良『紅毛雑話』（一七八

七）の「病院」項目から、ヨーロッパの「ガストホイス」（オランダ語 gasthuis）を「明人病院と訳す」という箇所を引用しながら、その典拠が艾儒略『職方外記』（一六二三）であることを知らず、「漢訳語の病院がどのようにしてオランダ語のガストホイスの代わりに使われるようになったかは今後の検討を要する」と留保する。しかしながら、安永天明期年間の蘭学勃興期ではオランダ語地理書よりも先に、漢訳地理書の『職方外記』が流行したために、「病院」「貧院」「幼院」の漢訳語が先に流布し、蘭学者たちはそれらに対応するオランダ語「ガストホイス」（gasthuis）、「アルムホイス」（armhuis）、「キスホイス」（wijshuis）をあとから注釈語として当てたのが実情であり、これらのオランダ語が外来語として定着したわけではない。『職方外記』流行の先鞭を付けたのはオランダ通詞・本木良永と松村元綱であった。[10]

「植民」は著者が示すように現代オランダ語 volksplanting の古語 volkplanting の訳語であるが、このオランダ語に最初に注目したのは本木良永であった。訳書『阿蘭陀地球図説』（一七七二）で、スペイン、フランス、イギリスの海外進出を示す原語 volkplanting を「ホルコプランティング」と音訳し「人民蕃育ノ術」と注釈している。訳語「植民」は志筑忠雄『鎖国論』（一八〇一）で、ケンペルの原文に日本発見後のポルトガル人について、「aangelokt door het vooruitzicht van winst, maakten zy daar groote volkplantingen」とある箇所を、彼らは「幾程なきに現前の利に誘われ大に是地に植民」したと訳したのが初出である。[11]

著者は「鎖国」は志筑忠雄の造語であり、その原語として、ラテン語の語句 regnum clausum（閉ざされた国）を挙げる。しかし、「鎖国」の語は志筑の訳書『鎖国論』の書名が初出であり、ケンペル『日本史』オランダ語版（一七七三）の付録Ⅵの長文タイトル「Onderzoek, of het vanbelang is voor 't Ryk van *Japan* om het zelve geslooten te houden, gelyk het nu is, en aan desselfs Inwooners niet toe te laaten Koophandel te dryven met uytheemsche Natien 't zy binnen of buyten 's Lands.」（日本国を現在のように閉じたままに保つことが、また、国内であれ国外であれ、この国の住民に他国民との交易を許さないことが、この国にとって緊要であるや否やの考察）を要約して「鎖国論」と翻訳したものである。ラテン語 regnum clausum はケンペル『廻国奇観』（Amœnitatum exoticarum, 1712）第Ⅱ部第14報告のラテン語タイトル[12]に現れる語句であって、志筑がこのラテン語報告に接したことを評者は知らない。

オランダ語の干渉によるローマ字使用の例としては、薩摩藩主・島津重豪が秘密を守るために書いたローマ字日記、福知山藩主・朽木昌綱が商館長ティチングあてオランダ語書簡で日本の日付を伝えるために用いた元号・月のローマ字表記、司馬江漢や亜欧堂田善が異国趣味を示すために用いたローマ字署名やローマ字表記、山東京

伝の読本『箕間尺参人酩酊』（一七九四）の表紙に用いられた装飾的なローマ字が挙げられる。最後の例について、評者が付言すれば、正確には四周にローマ字を配した絵入りの内扉（木版）を、表紙に題簽代わりに張り付けたもので、ローマ字のなかに、IOHANII、DODONAEUS などの人名が認められる。

著者はローマ字に使用するアルファベットの「ゴシック体、イタリック体など様々な書体」（三九一頁）を説明した書物として後藤梨春『紅毛談』（一七六五）を取り上げ、後藤が b[be:] に「べ」、v[ve:] に「イユ」の発音を与えていることをもって、日本人のオランダ語発音学習の困難さをいや増すものと説明している。この説明はアルファベットの名称と音価を混同したもので、当たらない。

著者が FIGURE 29（三九二頁）に写真を掲げる『紅毛談』のアルファベット図では、小文字筆記体が「テレツキリヤットル（草書の如きものなり俗にからくさ文字と云ものなり）」、大文字ローマン書体が「メルウリヤットル（行字の如きものなり）」、小文字ゴシック書体が「ドクルリヤットル（印板ニ用る字なり真字の如きものなり）」の見出しと説明のもとに木版で表示されて、各文字の名称は、例えば「T テ／U ユ／V イユ／W ドブルトイユ」のようにカナ書きで示されている。ここで、「テレツキリヤットル」は trekletter（トレックレッテル、筆記体）、「メルウリヤットル」は merkletter（メルクレッテル、折り丁記号書体の意、ローマン書体をさす）、「ドクルリヤットル」は drukletter（ドリュックレッテル、印刷書体の意、ゴシック書体をさす）の音訳の崩れた形である。ゴシック書体を drukletter と呼ぶのは、オランダ語書物の本文にゴシック書体が使用された十六～十七世紀の名残りである。「ドブルトイユ」は dubbeld V（重ねたVの意）の音訳である。「U ユ／V イユ」の名称も両文字を区別せず併用した十六～十七世紀の名残りである。評者には、このアルファベット図に見られる日蘭ひいては日欧の書字的干渉の方が興味深い。

「第八章　言語移行と言語後退」について

本章では、社会言語学の言語移行（language shift）概念を援用し、日本において特権的な外国語（または広域通用語）の地位を占めたオランダ語が十九世紀を通じて徐々に英仏独語へ地位を譲り、やがて衰退した歴史を三期に分けて文化史的に叙述する。

ロシア使節レザノフ来航（一八〇四）、英船フェートン号事件（一八〇八）からペリー来航（一八五三）までの第一期において、幕府は当初、フランス語、英語とロシア語の学習を長崎のオランダ語通辞に命じたが、著者は通辞のフランス語・ロシア語学習には触れない。オランダ通詞・森山栄之助が長崎滞在中（一八四八～一八四九）のアメリカ人漂流民ラナルド・マクドナルドから教えられ、英語に上達したことは、マクドナルドおよび一八五一年に出島に滞在したオラ

ンダ人船長コウルネリス・アッセンドルフ・デ・コーニングの証言で示される。

次に、著者は幕命により出島で作成された輸入蘭書目録『銘書帳』（一八三九～一八五九、永積一九九八）および佐賀藩鍋島家所蔵洋書目録（松田二〇〇六）における英語、フランス語の学習書・対訳辞典の増加、アヘン戦争以降一八四〇年～一八五〇年代中葉におけるオランダ語からの翻訳書の飛躍的増加を指摘し、洋学知識摂取におけるオランダ語の重要性とともに、オランダ語のサーレクト（thuiect、他言語学習のための媒介語）としての役割を強調する。著者はここで、総称『銘書帳』をMeisho-chōとしているが、各年の輸入蘭書目録の原本には多く「～持渡候書籍銘書」の書名が付けられており、『銘書帳（ながきちょう）』と読むべきである。また、日本語を見出し語とする仏英蘭三カ国語分類語彙である村上英俊『三語便覧』（一八五四）の刊行は第二期のトピックとして挙げるべきである。

神奈川条約（一八五四）から明治維新（一八六八）までの第二期については、著者はまず、長崎海軍伝習のためにオランダ海軍が派遣したオランダ人教官や医官ポンペ・ファン・メールデルフォールトが諸藩からの伝習生にオランダ語で講義し、オランダ語文法書・兵書・理学入門書の和刻本が続々と出版されるなど、オランダ語学習の活況を叙述する。また、『銘書帳』によって、オランダ人用のR・ファン・デル・ペイル『フランス語教本』（一八四三）およびリンドレー・マレー『英文法』（一八五二）が大量に舶載されたことも指摘する。次に、幕府の蕃書調所（一八五六設立）における箕作阮甫など蘭学者の翻訳事業と英語研究へのシフト（一八六〇年頃）、福沢諭吉の英語学習と『増訂華英通語』（一八六〇）の出版、大隈重信、中村正直の英語学習、二人のオランダ系アメリカ人C・J・ヒュースケン、G・フルベッキの活躍を述べ、最後に、オランダ語が日本と諸外国の条約締結交渉における外交言語としてなお重要な位置をしめたことを例示する。第二期の叙述に、蕃書調所における堀達之助『英和対訳袖珍辞書』（一八六二）の編訳刊行が漏れているのは残念である。

第三期の明治維新以降、医師K・ハラタマ、薬学者A・C・J・ヘールツ、土木技師C・J・ファン・ドールンおよびJ・デ・レイケなどオランダ人御雇教師の活躍にもかかわらず、オランダ語は科学技術の専門分野で急速に衰退する。著者は専門分野におけるオランダ語離れの重要な事象として、専門語を多く含む英漢辞典の役割を指摘するが、その例として村田文夫編『洋語音訳筌』（一八七二）を挙げるのはいただけない。著者は本書を、英漢辞典によって翻訳した漢訳洋書の和刻本をもとに専門語を編纂したものと説明するが、実際は時事的な地名・人名の漢訳表記辞典に過ぎない。

著者は日本におけるオランダ語をヒトの「ライフサイクル」に見立て、その死を明治の物理学者・山川健次郎編『物理学術語和英仏

独対訳辞書』（東京、一八八八）からオランダ語が消えた事実に見出している。[13] その二年前に刊行された蘭訳『舌切雀』、すなわちオランダ海軍技師ファン・スヘルムベーク（Pieter Gerand van Schermbeek）が著した絵入りの『フアンスケルンベーキ訳述舌切雀』（東京、弘文社、一八八六）を、著者は日本で出版された最後のオランダ語書として、カラー挿図（FIGURE 33, 四二三頁）入りで紹介している。

『舌切雀』の書名は日本におけるオランダ語の瀕死に偶然にも合致しており、読者の憐れを誘うが、評者としては、仏独英蘭日の軍事用語辞典『五国対照兵語字書』（西周序、参謀本部、一八八一）も、十九世紀初頭の対外危機以来、西洋兵学摂取の歴史において、ながらく独占的地位を占めたオランダ語の瀕死状態を伝えるものとして、加えたい。

以上、本書を通読して目にとまった事例や問題点を章ごとに取り上げ、見解を加えた。評者は社会言語学に疎く、いささか我田引水に過ぎたところもあるかもしれない。著者が三百年間に日本で使用された「さまざまなオランダ語」の事例を膨大な一次資料群から摘出し、既存の関係研究書を参照して、この大著をまとめられた労苦を多としたい。本書で利用された日本語一次資料の書名索引（検索番号付き、四六五〜四七四頁）は英語圏研究者にとどまらず、日本人研究者にも有益である。

注

（1）以下、研究文献は刊行年のみを示し、書名等は本書の文献目録に譲る。

（2）本書の表記 Matsūra は Matsura が正しい。

（3）紹介したことは本書一一四頁に記載される。

（4）松田清（一九八九）『洋学の書誌的研究』臨川書店、三四九頁。松田清（二〇〇二）「松浦静山旧蔵未公開貴重資料目録」『兼葭堂時代の日本文化――旅とサロンと開かれた知性』特定領域研究（A）「江戸のモノづくり」総括班、記載の「満黎意思烈的廬（まれいすれってる）」解題および口絵写真、参照。静山の識語によれば、天明六年に商館長ロンベルフに命じて、その従者でバタヴィア近傍生まれの十七歳の青年にマレー文字を書かせたという。

（5）『蘭語訳撰』を「woodblock-print Dutch-Japanese lexicon」（七八頁）と説明しているが、Japanese-Dutch lexicon の誤りである。

（6）長崎の悟真寺の名が引用されているのに対し、掛川の天然寺の名は示されていない。

（7）佐賀藩蘭書目録の部立て「度学并算学書」の読み、dogaku heisangaku sho は誤り。

（8）このオランダ語訳の原典であるドイツ語訳がすでにキリスト教的編訳であった。オランダ語訳の特徴は、むしろ近代オランダ人旅行家の著作からの豊富な引用にあり、松村元綱の抄訳もその新情報に力点があった。

（9）松田清（一九八九）、一九七〜二一九頁参照。

（10）『職方外記』の翻訳『万国地理図説』（写本、長崎文化博物館所蔵本木家寄託資料）は両者による安永年間の共訳と推定される。なお、明治初年までは、「養生所」や「療病院」が定着しており、「病院」がそれらに代わる経緯は今後の検討を要する。

（11）『講談社オランダ語辞典』（一九九四）九一九頁、volksplanting 項目の評者執筆コラム参照。

（12）タイトル原文（四七八頁）は「Relation XIV. Regnum Japoniæ optimâ ratione,

ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum.」（第XIV報告。日本国は市民の出国と外国人の入国および交通が厳しく閉鎖されていること）。また、第Ⅱ部目次（二五二頁）には「14. Regnum Japoniæ optimâ ratione clausum.」（14．日本国は厳しく閉鎖されていること）とある。

（13）ただし、この対訳辞書の日本語タイトルが本書の本文注にも索引にも見当たらない。